

《研究ノート》

アニマルセラピー：管理者への応用可能性

林 徹

Abstract

Are managers more prone to raise pets than rank-and-file? Although there is much physiological, psychological, or psychosocial research on the effect of raising pets on individuals in general, patients, inpatients, younger people, elderly, etc., there seems to be little focus on managers who seem to have more stress in business than non-managers. After reviewing the literature relevant and surveys by Ministry of the Environment, we show the facts found in the interviews toward ten managers incumbent with original questionnaire (Kusubayashi, 2017). We found an intrigue fact through the interviews. On the one hand, the managers who used to have pets, i.e. do not have now, are likely to regard pets as his/her own child. On the other, the managers who have pets now are not likely.

Keywords : manager, pet, child, stress, interview

目 次

- 1 はじめに
- 2 動物と人間
- 3 ペットと人間
- 4 アニマルセラピー
- 5 アニマルセラピーに関連する知見
- 6 植物とロボットの可能性
- 7 楠林 (2017) による研究
- 8 おわりに

1 序

アニマルセラピーは和製英語である。同様に、バイオセラピーも造語である。それらは共通して、精神的・肉体的に疾病を患っている人、ひきこもりや登校拒否などの社会不適応傾向にある人、命にかかわる重い犯罪などで少年院に入っている人、こうした人々の改善に、万能ではないにせよ、一定の効果があることがわかっている。

であれば、精神労働の典型である管理者のケア、すなわち管理者の健全な意思決定にも一定の効果があるはずである。事実、卑近な一例ではあるが、筆者の親族・姻族には個人経営ないし会社経営者が多く、かつ、そのなかの大半がペットを飼っているかまたは飼っていた。にもかかわらず、それらの関連性をテーマとした先行研究はほとんど存在しない。

わが国において、動物は民法上動産（86条3項）である。食物連鎖の見地からは、生きとし生けるものであることに疑いの余地はない。しかし、ペットロボットに関してどうかと言えば、必ずしも生きものとは言えない面もある。動物、植物、またはペットには、このように機械的なモノと動植物的な生きものの両面がある。

以下では、第1にアニマルセラピーに関する先行研究をレビューし、第2に楠林（2017）を紹介して管理者とペットとの関係を探究することの学術的な位置と現実的な意義を明らかにし、第3に今後の研究課題を展望する。

2 動物と人間

ルネ・デカルト（René Descartes）による心身二元論以降、西洋医学は心と身体を完全に分けて進展し、細分化されてきた。しかし、近年、免疫系の研究を中心に東洋医学の考え方が再発見されている。すなわち、横山(1996, pp. 89-93)によれば、闘病に対する精神的なケアが生存期間と関係している

という報告、運動や笑いが不安軽減や抗抑うつ作用があるという報告、などである。また、柳澤（1994, p.20）は「私たちのまわりに見られる時間的・空間的な繰り返しの間の関連に整合性を感じたとき、私たちは、安堵を覚え、それがエルドルフィンと関連しているのではないかと夢想してみたくなる。」と述べている。

歴史的に人間との絆が強い動物は、横山（1996, pp.107-109）によれば、犬、猫、馬であり、逆に、これら三者はともに人間とのつながりが必要な動物であり、人間と共生関係にある。また、先行研究によれば、イルカが人間に対してストレスを感じているように見えるのに対して、犬は社会性を持っているためにストレスを感じにくいと考えられている。

わが国では1685年、五代将軍徳川綱吉によって有名な「生類憐れみの令」が発令された。しかし、これに前後して、「捨子・捨病人と捨牛馬との禁止令」、「村の鉄砲の取締」が強化された。綱吉は次のように考えたものと横山（1996, pp.112-113）は推察している。すなわち、動物、子ども、病人などを粗暴に扱うことは、すべてに対する感覚を粗暴にし、国の安定に影響する。目先の小さなプラスにとらわれると、大きな目を見たときにマイナスになりうる。人間本位による、動物のストレスを全く考えないセラピーを行うことは、セラピー自体をも否定することになりかねない、と。

ただし、動物の行動に「思いやり」があるか否かについては、議論がわかれる。これを肯定的にみるモーリス・バートン（Maurice Burton）『動物に愛はあるか』などもあれば、否定的にみるリチャード・ドーキンス（Richard Dawkins）『利己的な遺伝子』などもある。しかし、前者は人間の視点から見た偏ったものであるという見方が支配的であり、思いやりよりもむしろ好奇心としてみるほうが整合的である（横山, 1996, pp.87-88）。こうした議論のなかで動物に対する根源的な見方に関して、たとえば動物の安楽死について逡巡する獣医学部の学生に対して、横山はこう答えている。

「あなたの悩みは正解です。悩みなさい。欧米人たちが動物を安楽死させ

るのは、その長い動物とのつき合いの中でイデオロギーから導き出した考え方です。それは彼らにとっては正しいのです。動物と人間の隔たりをきちんと作っていますから。ところがわれわれにはその考え方はない。ですから、もしあなたが何の疑問もなく悩みもなく動物の安楽死を認めてしまったら、動物との隔たりのないわれわれは、人間の安楽死も当たり前のように認めることになるでしょう。それはとても危険なことです。欧米で発展した科学から生み出されたもの、例えば獣医学にしても、それは知識だけではなく、彼らのイデオロギーも反映しているのです。悩みなさい。そして深く考えながら行動しなさい。あなたの悩みが正解なのです。」(横山, 1996, p. 124)

3 ペットと人間

そのような考え方に基づいて、ペットとは何かという問いに対して、横山(1996, p. 171)は次のように説明している。すなわち、ペットとは以下のすべてが重なった存在である。第1に、兄弟、友人、子ども、孫、家族。保護し、またはされる相手。第2に、異性を連想させる相手。第3に、自然の一部。第4に、自らの一部(行動を調節する相手)。第5に、孤立、または遊び相手。ただし、人間側の年齢、社会的立場、置かれている境遇、などによって都合よく変わる面もある。

加えて、避けることのできない「ペトロス」の援助をしてくれるのは「次に新しく飼う動物」(横山, 1996, pp. 166-167)である。新しく動物を飼うことについて、人は、死んだ前の動物に対して悪いと思いがちであるかもしれない。これに対して動物側はどうか。ローレンツ『人イヌにあう』「忠節と死」(Lorenz, 1958, 邦訳, pp. 238-248)は、次に新しく動物を飼わないとすれば死んだ動物は喜ばないのではないか、と述べている。

したがって、人のペットとの関わり方について横山の考えはこうである。「人間も世代によって人生のサイクルは異なるが、一緒に暮らす期間に充実

した触れ合いを持てれば充分幸せである。ペットの場合も限られた寿命の期間に充実した触れ合いを持つことで幸福な人生を全うできるのではないか。」(横山, 1996, p. 162)

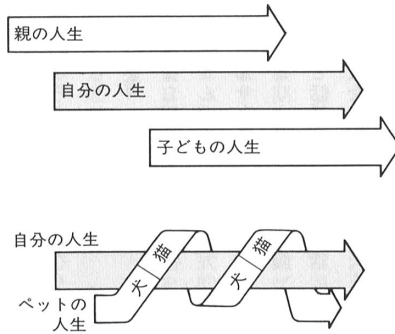


図1 ペットの人生サイクルと人間の人生サイクル

出典：横山 (1996, p. 162)

このように、ペット、動植物に対する死生観やその受け止め方については洋の東西、時代の変遷、あるいは個人によって異なる面はあるものの、以下にみるように、患者や社会不適応傾向にある者の治療や改善には共通する面もある。

4 アニマルセラピー

まず、的場 (2015) によれば、動物介在活動 (Animal-assisted Activity)、動物介在教育 (Animal-assisted Education)、動物介在治療 (Animal-assisted Therapy) から成る、アニマルセラピー (和製造語) の発展の基礎として2つの国際組織がある。1つは、ISAZ (The International Society for Anthrozoology: <http://www.isaz.net>) であり、人と動物の相互作用に関する学術誌『人と動物の関係学』(HAI: Human Animal Interaction) *Anthrozoös*

を発刊している。もう1つは、IAHAIO (International Association of Human-Animal Interaction Organizations: <http://www.iahaio.org>) であり、人と動物との相互作用の正しい理解を促進させるために各国で活動している学会、協会等の国際的な連合体である。3年に1度、国際会議を開催している。

アニマルセラピーのこうした世界的な展開の中で、わが国においては、吉田(2015)によれば、1978年に公益社団法人日本動物病院協会(JAHA: Japanese Animal Hospital Association)が創立された。これは、人と動物の絆を守り、維持するための家庭動物医療の実践と社会貢献をする動物病院の協会であり、①動物病院・動物医療の充実のための継続教育事業・資格付与関連事業、②動物病院による地域社会への貢献を推進する事業、③アニマルセラピー推進(CAPP活動: Companion Animal Partnership Program)・調査研究事業、を行っている。1986年5月以降、老人保健施設、精神科病院、小児科病院などで、AAAまたはAATを実施している。

次に、社会復帰が見込めないケースにおいても、その効果が報告されている。

表1 JAHA CAPP活動 小児病棟 ATT訪問先病院リスト

(2015.4現在)

病院施設名	開始年
1. 聖路加国際病院	2003
2. 千葉県こども病院	2005
3. 横浜市立大学附属病院	2010
4. 埼玉県立小児医療センター	2013
5. 千葉大学医学部附属病院	2013
6. 東京慈恵会医科大学附属病院	2014
7. 天竜病院	2015

*CAPP: 1986年に開始したJAHAの人と動物のふれあい活動の名称

たとえば、白木ら（2016）によれば、セラピー犬の訪問は、介入動物の調教と安全衛生の確保を条件に、一般病院 PCU（緩和ケア病棟）において支障なく導入でき、患者、家族、職員に癒しの効果が認められている。

さらに、医療施設の外においてもその効果が報告されている。

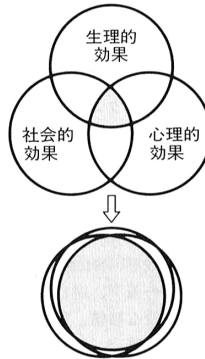
たとえば、飯田ほか（2008）によれば、学校不適応傾向にある小学校3年生から中学校3年生までの女子児童・生徒11人と中学校2年生の男子生徒1人に対する AAT プログラム3回の施行を通じて、心理状態（緊張・不安、活気、疲労、混乱）の改善、自我状態の安定傾向が認められている。

また、中村（2015）によれば、更生支援パートナードッグ・プログラムを通じて、「犬とふれあうときのルールを通じて人間社会のルールを学ぶきっかけになる。犬のボディサインを学ぶことで、他者の気持ちを知ることにつながり、社会における自分の居場所を獲得することにもなる。愛知少年院には生命犯が多く、犬にふれあう授業によって、血が通っている犬のあたたかさを学ぶのに適していた。犬を通して命の大切さを感じとってもらえたのではないか。」と少年院の教官が述べている。

5 アニマルセラピーに関連する知見

わが国におけるこうした CAPP, AAT, AAA への取り組みの背景として、先行研究においてそれらの効果を担保する科学的な知見がある。横山（1996, p. 53）によれば、「動物がどういう利点を人間に及ぼすか」は、生理的、心理的、社会的、の3面に分けられる（図2）。これらは相互に複雑に重複しており、相互に関連し合うことで、日常生活に必要な安定性と心地よい変化を人間に与える。3面それぞれの利点を整理したのが表2である。以下、代表的な知見を順次紹介する。

ただし、ガンターは、動物介在療法における方法上の問題を指摘している。要約すると、第1に、動物の心理療法的効果に関する証拠は、多くが治療的



三つの効果が相互に関連し合って、単一の効果では達成できないような大きな効果を上げることができる。

図2 アニマルセラピーの効果概念図

出典：横山（1996, p. 54）

表2 アニマルセラピーはどういう利点を人間に及ぼすか

生理的利点
1) 病気の回復・適応、病気との闘い
2) リラックス、血圧やコレステロール値の低下
3) 神経筋肉組織のリハビリ（特に乗馬療法）
心理的利点
1) 元気づけ、動機の増加、活動性（多忙）・感覚刺激
2) リラックス、くつろぎ作用
3) 自尊心・有用感・優越感・責任感などの肯定的感情、心理的自立を促す
4) 達成感（特に乗馬療法）
5) ユーモア、遊びを提供する
6) 親密な感情、無条件の受容、他者に受け入れられている感じの促進
7) 感情表出（言語的・非言語的）、カタルシス作用
8) 教育的効果（子どもに対して）
9) 注意持続時間の延長、反応までの時間の短縮
10) 回想作用
11) 自分の境遇と重ね合わせる
社会的利点
1) 社会的相互作用、人間関係を結ぶ「触媒効果・社会的潤滑油」
2) 言語活性化作用（スタッフや仲間との）
3) 集団のまとまり、協力関係
4) 身体的、経済的な独立を促進する（盲導犬、聴導犬など）
5) スタッフへの協力を促す

出典：横山（1996, p. 53）

印象から出されたものである。この種の証拠の問題点は、第2に、動物の治療効果が想定される患者群に対する比較対照群を調査において設けていないことである。第3に、動物介在療法では、しばしば動物自体が魅力的であるがゆえに研究者自身が肯定的な見方に偏りがちである。また、第4に、動物福祉に関する倫理的な問題もある (Gunter, 1999, p. 80, 邦訳, p. 105)。

第1に、主として生理的な利点は以下のようなものである。

一般を対象とするものとして、動物とふれあうことによる血圧降下がある (Baun et al., 1984)。すなわち、半年以上いっしょに暮らして親しい関係にある自分の犬をなでているときの血圧の下がり方は、見知らぬ犬と比べて大きい。またそのくつろぎの作用は、静かに雑誌を読んでいるときと同じような下がり方である。

心筋梗塞患者を対象とするものとして、交感神経活動の抑制 (本岡ほか, 2002), などがある。

精神疾患患者を対象とするものとして、鬱病や人格障害患者に対する治療効果 (山崎・町沢, 1994), 病棟における抑鬱の減少 (Barker and Dawson, 1998), 認知症治療における効果 (加藤・渥美, 2002), 境界性人格障害に対する治療効果 (佐藤ほか, 2003), 脳血管性痴呆患者の運動機能の一部改善 (鈴木ほか, 2002), 統合失調症患者の意識変化 (Nathans-Barel et al., 2005), などがある。

第2に、主として心理的な利点は以下のようなものである。

一般を対象とするものとして、安心感 (Hoffman, 1991), 孤独感の減少 (Kehoe, 1991; Banks and Banks, 2002), 抑鬱の軽減 (Folse et al., 1994), 不安の軽減 (Barker and Dawson, 1998), などがある。また、ボリン (Bolin, 1987) によれば、長期間にわたって犬と過ごすことによりペットと深い絆があれば、飼い主はペットロスに対して高い対処能力を示す。すなわち、犬を飼っている人はそうでない人よりも配偶者の喪失にうまく対応できる傾向がある。

高齢者を対象とするものとして、周囲に友人や親戚がいない社会的に孤立していて、かつ過去1年間に伴侶を亡くした老人のうち、ペットを飼っている人は、そうでない人に比べて、重い抑鬱状態になっていない割合が高い (Garrity et al., 1989)。また、高齢者のペットを飼っていることやペットへの好感度と、健康との関係について、ペットに関する変数が「気力」、自己報告による「健康度」、と相関がある (Lago et al., 1989)。さらに、アルツハイマー患者の健康状態の変化 (Edwards and Beck, 2002)、孤独感の減少 (Banks and Banks, 2002)、などがある。

子どもを対象とするものとして、ストレス軽減効果 (Nagengast et al., 1997)、広汎性発達障害の感情表現が豊かになって集中力が上がる効果 (Martin and Farnum, 2002)、てんかんを予知する犬 (Kirton et al., 2002)、などがある。

他方で、動物虐待は、児童虐待や反社会的行動と関連性がある (Tapia, 1971)。激しい虐待を受けた子どもは、動物の苦痛に共感する力がないため、良心を痛めることなく動物に欲求不満や敵意をぶつける。動物虐待は、したがって、無力間や劣等感に対する代償行為 (Gunter, 1999, p. 141, 邦訳, p. 181) でもある。

第3に、主として社会的な利点は以下のようなものである。

エディら (Eddy et al., 1988) が、ショッピングセンターにおいて車椅子に乗った子どもが介助犬を連れている場合と連れていない場合で、周りの人がどう反応するかを調査したところ、後者はほとんどだれも微笑みかけなかったのに対して、前者は3人から5人に1人が微笑みかけるなど、笑顔・会話が増した。また、ロックウッド (Lockwood, 1983) によれば、人間があるポーズをとって描かれている同じ構図の絵について、片方には絵のどこかに動物が描かれ、もう片方にはそれがない2枚の絵を被験者の学生68人に見せて感想を比較したところ、後者に比べて前者は、その人間が、友好的で、幸福で、大胆で、緊張が少なかった。

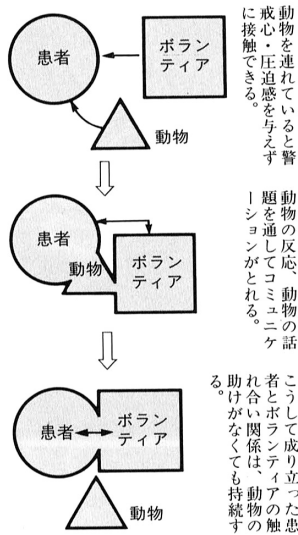


図3 動物を通じた患者とボランティアの触れ合い

出典：横山（1996, p. 100）

動物の存在は人間と人間の間の緩衝剤や潤滑油としての効果がある（横山, 1996, pp. 100-101）。図3のように、まず、動物を連れてきているのであるから友好的な人であろう、と値踏みをすることで第1ハードルがクリアされる。その後、動物をなでたり名前を聞いたりしながら、相手がどういう人か、価値観はどうか、突然怒ったりしないか、が見定められていく。こうして第2ハードルがクリアされると、お互いが安心して、話も動物のことから他のことへと伸びてゆく。

慢性精神病患者グループにおいて、ベックら（Beck et al., 1986）によれば、小鳥の籠を置いた部屋でミーティングをするほうが、そうでない部屋よりも患者たちが活動に積極的に参加する。コーソンら（Corson et al., 1977）によれば、情緒障害のある患者グループがアニマルセラピーによって感情面の改善が見られた。ホルコムとミーチャム（Holcomb and Meacham, 1989）

によれば、精神科入院病棟でいろいろな活動グループをつくってどの活動に患者たちが積極的に参加したかを調査した結果から、アニマルセラピーがいちじるしく多くの患者を誘引し、またいつも孤立している患者をも誘引する。

6 植物とロボットの可能性

アニマルセラピーの効果と関連して、むしろ植物に光をあてた概念がバイオセラピーである。バイオセラピーとは農業の発展型であって、広狭2つの概念を持つ和製英語である。広義のそれは生き物とふれあうことによって情操教育や健康維持に寄与するものであり、狭義のそれはさまざまな心身のハンディを克服するために医療に準じた行為として実施されるものである（林, 2012, p. 1）。松尾によれば、

「バイオセラピー学は、人間と動植物とのよりよい関係のあり方を、私たちの心身の癒し、健康の回復・維持・増進、生きがいの創生、快適環境の創造および、地球上における生物資源の持続的保全に活用することをめざしている。この地球上で人間と動植物がともに健康に生きながらえるには、どの

表3 生産科学と生活科学としての農学

項目	生産科学	生活科学
主な対象	農家	すべての国民
研究・教育の主な対象	作物・家畜の生産性	人と動植物との関係性
主なねらい	商品生産	幸せな暮らし、環境の最適化
進め方	効率的・合理的	効率にこだわらない、楽しく
かわり方	義務的	参画的、自由
具体的な目標	経済的利益	生活の質の向上、健康回復・維持・増進、リハビリテーション、治療、仲間づくり、まちづくり、環境改善
金銭での評価	容易	困難

出典：松尾（2012, p. 158）

ような関係を築きあげればよいかを身近な日常の暮らしのなかから学び、生かす『生活科学としての農学』であり、伝統的な『生産科学としての農学』と対称的（ママ）である（表3）。」（松尾, 2012, p. 158）

さらに近年では、アニマルセラピーに比べて感染症のリスクが小さいロボットセラピーによる代替治療効果（横山, 2001, 2002；岩橋ほか, 2003；浜田ほか, 2003）が期待されている。ただし、ロボットセラピーについては、図1（ペットの人生サイクルと人間の人生サイクル）と関連して死生観の問題が微妙に影を落とす面もある。

にもかかわらず、アニマルセラピー（以下、バイオセラピーとロボットセラピーを含むものとする）の応用がまだ報告されていない領域もある。

たとえば、健康経営の嚆矢とされるローゼン（Rosen, 1986）は、著書の中で、ヘルシーカンパニーという概念によって、とくに米国流経営において分断されてきた経営管理と健康管理を統合的に捉えようとしている。豊富な事例をふまえてはいるものの、ヘルシーカンパニーのエッセンスは、ハーツバーグによる伝統的な動機づけ＝衛生要因理論と何ら異なるものではない。同書では、従業員の健康管理の重要性を唱えているにもかかわらず、数多くの効果が報告されている現代的な動物介在活動の応用とその可能性に関しては触れられていない。

また、教員や管理職のバーンアウトのプロセス、それに対する組織的な取り組みについての報告（e.g., 露口・高木, 2012；新井, 2013；宮下, 2013, 2016）はある。しかし、それらに対するアニマルセラピーの応用例はない。

7 楠林（2017）による研究

ペットを飼うことや動物とふれあうことが管理者にどのような影響を及ぼしているか。また、ペットを飼うことや動物とふれあうことで管理者に共通する一定の感覚が存在するのか。さらに、ペットを飼うことや動物とふれあ

うことと管理者のストレスへの対処の間に一定の関係があるのか、ないのか。こうした問題意識から、楠林（2017）は、ペットと管理者の関係を上げていく。管理者の定義は、部下を1名以上抱えている者または法人としての会社を管理・運営する立場にある者、である。

まず、環境省の世論調査「動物愛護に関する世論調査（平成22年）」の結果を確認する。

第1に、世間一般で感じられているペットを飼うことの利点は、上位順に、生活に潤いや安らぎが生まれる、家庭が和やかになる、子どもたちが心豊かに育つ、である。しかし、飼育者を管理者に絞った調査結果の記述はない。第2に、同調査におけるペットを飼っている割合と管理職のうちペットを飼っている割合を比較すると、管理職のその割合は、全体からみると相対的に高い。第3に、職業別のペット飼育の割合をみると、職業による偏りはほとんどみられないが、事務職と無職（主婦・学生を含む）が相対的にやや少ない傾向にある。第4に、ペットの種類を職業別にみると、どの職業でも、多い順に、犬、猫、魚類、となっている。管理職についてみると、犬を飼育している割合が他の職業に比べて相対的に低く、魚類・昆虫類の割合が高い。

以上の結果は、ガンターの説明をおおむね裏付けている。それを要約すれば、ペット所有率は、家族の最年長者が30歳から49歳までの家庭でもっとも高く、都市部では犬を飼っている人は集合住宅よりも一戸建てが多い。他方で、猫、鳥、魚の飼い主は居住場所で差はない。ペットを飼う率をもっとも高いのが新婚時代、小学生の子どもがいる家族、十代の子がいる家族であり、逆に、配偶者との死別者をもっとも低い（Gunter, 1999, pp. 19-20, 邦訳, pp. 25-26）。

こうした結果をふまえて、楠林（2017）は、2016年に、以下の調査票に基づき10人の管理者に対して半構造型のインタビューを行っている。調査票の項目は次の通りである。

- ① 属性（性別，年代，部下がいる（た）期間）
- ② ペットを飼った経験（なにを，数，期間）
- ③ きっかけ（飼い始め，飼い終わり）
- ④ 主に面倒を見ている（た）のは
- ⑤ 生活の変化（飼ってから，いなくなってから）
- ⑥ ペットの役割は人間でとってかわれるか
- ⑦ 仮にいまペットがいなくなったら
- ⑧ その他

インタビュー調査の分析結果は次の通りである。

まず，ほとんどの管理者に共通しているのは，第1に，事務的な仕事に従事していた時や部下を持つ前と比べて，上下の人間関係における板挟みになっていること，また誰かが答えをくれるわけでもないこと。第2に，責任の大きい意思決定の連続によりストレスを感じやすいこと。これらである。ただし，自営業者はあまりストレスを感じていない。

次に，ペットを飼っている管理者が，自身の飼っているペットに癒やされている。しかし，管理者にとっての特別な役割をペットに見出すことはできていない。「管理者にとっての」という部分を浮き彫りにするには，部下を持っていない人，もしくは会社を経営していない人との比較をする必要がある。

最後に，1つの発見事実がある。表4をよくみると，現在動物を飼っている回答者と飼っていない回答者の間ではある項目に違いがみられる。それは調査項目6の質問「ペットの役割は人間でとってかわれるか」である。表4の太枠部分から，現在飼っているか飼っていないかという条件のもと，回答に違いが表れている。

質問項目6において，現在ペットを飼っていない回答者は，ペットの役割が人である程度，代替可能であり，幼い子どももペットと同じような役割を果たす（子どもがペットという意味ではない），と回答している。

表4 インタビュー調査の結果

	性別	年代	部下がいる 期間	飼った経験	現在の飼育の 有無	種類	数 (現在)	飼っている 年数	動機	世話	生活の変化	役割	いなく なったら
回答者1	女性	40代	5年	5	○	犬	1	14年目	×	○	△	×	○
回答者2	男性	40代	18年	5	○	猫	1	1年目	×	○	○	×	○
回答者3	女性	40代	5年	5	○	犬	1	3年目	×	○	○	×	△
回答者4	男性	50代	18年	4	○	犬	1	7年目	○	○	○	△	○
回答者5	女性	50代	22年	5	○	犬	2	7年目	○	○	○	×	○
回答者6	男性	50代	5年	5	○	鳥	3	8年目	○	○	△	×	○
回答者7	男性	40代	8年	4	×	魚・猫			×	○	○	△	○
回答者8	男性	30代	10年	4	×	犬			×	×	×	△	△
回答者9	男性	50代	5年	2	×	鳥・魚			×	○	×	△	×
回答者10	男性	40代	10年	4	×	魚類			×	○	○	△	△

出典：楠林(2017)

- 注：① 種類に関して、現在ペットを飼っていない回答者は、飼ったことのある動物について表記している。
- ② 動機、世話、生活の変化に関して、過去に飼った経験に基づいた回答を表記している。
- ③ 記号の意味は次の通りである。

飼った経験

- 5：子どもの頃～現在（0～5年ほどのブランク有り）
 4：子どもの頃～現在（5年以上のブランク有り）
 3：子どもの頃～成人するまで
 2：子どもの頃（～中学生）のみ
 1：ほとんど飼った経験なし

動機・世話

- ：回答者、もしくは回答者と家族が飼うことを決めた、世話をしている
 ×：回答者は飼うことについて意思決定していない、世話をしていない

生活の変化

- ：あった
 △：わからない
 ×：なし

役割

- ：かわれる
 △：ある程度かわれる（子ども：子どもも幼いうちは似たような役割を果たす）
 ×：かわれない
 いなくなったら
 ○：また飼う
 △：わからない、今は考えられない
 ×：飼わない

出典：楠林（2017）

これに対して、現在ペットを飼っている回答者は、6人中5人が代替不可能と答えている。それらのうちある回答者は、ある程度代替可能と答えているものの、子どもが同じような役割を果たすとは答えていない。これらから、子どもとペットは異なる存在であることがあらためて確認される。

この発見事実に関連して、ガンターは次のように述べている。すなわち、「子どものいない夫婦に関するステレオタイプの1つは、子どもをもつことができない、望まない子どもの代わりとしてペットを利用しているというこ

とである。子どもに与えられていたかもしれない情緒的な価値と母性行動のすべてをペットに注ぐ子どものいない夫婦のケースがたしかに存在する。しかしながら、このテーマに関してはわずかな資料しかない。」(Gunter, 1999, pp. 10-11, 邦訳, pp. 12-13), と。

したがって、この説明から、サンプル数などの制約はあるにせよ、楠林(2017)による調査には一定の学術的意義を認めることができる。また、ロリンズら(Rollins et al., 1973)は次のように指摘している。すなわち、ペットと子どもがその役割を交代できるなら、家族によっては子どもがペットの役割を果たすために選ばれることもあるかもしれない。その子どもは特権を与えられ、ちやほやされ、注目の的となり、ご機嫌をとられたりして、家族を楽しませる機能を果たすことが期待される、と。

8 おわりに

アニマルセラピーは1980年代から急速に世界的な展開をみせており、主として社会的弱者の生活の質の改善にその効果を見出すことができる。にもかかわらず、同様に精神的なプレッシャーのもとにおかれ、自殺に追いやられることさえもある管理者を対象とする調査研究は見あたらない。他方で、ペットの飼育に関する統計的な調査は行われているが、ペットロボットはいまのところその射程外のようなのである。

したがって、たとえば、会議室、取調室、演習室、面接室、などといった、息が詰まりそうな緊迫した空間に、壁に動植物やロボットの写真や絵があるとしよう。あるいは、スーツにそれらの絵を描くことは無茶であろうから、せめて、その写真や絵を各人が首に掛けているとしよう。

こうした場面を想像しただけでも、すべての人たちが無用な緊張から解放され、それぞれに適切な意思決定が促され、能力を発揮し、建設的な成果を得られるのではないか。同時に、個々の家庭でも同じ工夫が施されれば、相

互に相乗効果を期待できるように思われる。ただし、現段階ではこれらは仮説であって、今後実証されるべき研究課題である。

参 考 文 献

- Banks, Marian R. and Banks, William A. (2002) "The effect of animal-assisted therapy on loneliness in an elderly population in long-term care facilities," *Journal of Gerontology: Medical Sciences*, Vol. 57 A, No. 7, M 428-432.
- Barker, Sandra B. and Dawson, Kathryn S. (1998) "The effect of animal-assisted therapy on anxiety ratings of hospitalized psychiatric patients," *Psychiatric Services*, Vol. 49, No. 6, pp. 797-801.
- Baun, Mara M., Bergstrom, Nancy, Langston, Nancy F., Thoma, Linda, (1984) "Physiological effects of human/companion animal bonding," *Nursing Research*, Vol. 33, No. 3, pp. 126-129.
- Beck, Alan M., Seraydarian, Louisa, and Hunter, G. Frederick (1986) "Use of animals in the rehabilitation of psychiatric inpatients," *Psychological Reports*, Vol. 58, Issue 1, pp. 63-66.
- Bolin, Sharon E. (1987) "The effects of companion animals during conjugal bereavement," *Anthrozoös*, Vol. 1, Issue 1, pp. 26-35.
- Burton, Maurice (1978) *Just like an Animal*, London: Dent. (垂水雄二訳『動物に愛はあるか：おもいやりの行動学』早川書房, 1985.)
- Corson, Samuel A., Arnold, L. Eugene, Gwynne, Peter H., and Corson, Elizabeth O'Leary (1977) "Pet dogs as nonverbal communication links in hospital psychiatry," *Comprehensive Psychiatry*, Vol. 18, Issue 1, pp. 61-72.
- Dawkins, Richard (2006) *The Selfish Gene*, 30th anniversary ed., Oxford, UK: Oxford University Press. (日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳『増補新装版 利己的な遺伝子』紀伊國屋書店, 2006.)
- Eddy, Jane, Hart, Lynette A., and Boltz, Ronald P. (1988) "The effects of service dogs on social acknowledgements of people in wheelchairs," *The Journal of Psychology*, Vol. 122, Issue 1, pp. 39-45.
- Edwards, Nancy E. and Beck, Alan (2002) "Animal assisted-therapy and nutrition in Alzheimer's disease," *Western Journal of Nursing Research*, Vol. 24, Issue 6, pp. 697-712.

- Folse, Eileen B., Minder, Carolyn C., Aycock, Melanie J., and Santana, Ronald T. (1994) "Animal-assisted therapy and depression in adult college students," *Anthrozoös*, Vol. 7, Issue 3, pp. 188-194.
- Garrity, Thomas F., Stallones, Lorann F., Marx, Martin B., and Johnson, Timothy P. Johnson (1989) "Pet ownership and attachment as supportive factors in the health of the elderly," *Anthrozoös*, Vol. 3, Issue 1, pp. 35-44.
- Gunter, Barrie (1999) *Pets and People: The Psychology of Pet Ownership*, London: Whurr. (安藤孝敏・種市康太郎・金見恵訳『ペットと生きる：ペットと人の心理学』北大路書房, 2006.)
- Hoffman, Rosemary G. (1991) "Companion animals: A therapeutic measure for elderly patients," *Journal of Gerontological Social Work*, Vol. 18, No. 1/2, pp. 195-205.
- Holcomb, Ralph and Meacham, Mary (1989) "Effectiveness of an animal-assisted therapy program in an inpatient psychiatric unit," *Anthrozoös*, Vol. 2, Issue 4, pp. 259-264.
- Keohoe, Monika (1991) "Loneliness and the aging homosexual: In pet therapy an answer?", *Journal of Homosexuality*, Vol. 20, No. ¾, pp. 137-142.
- Kirton, Adam, Wirrell, Elaine, Zhang, James, and Hamiwka, Lorie (2004) "Seizure-alerting and -response behaviors in dogs living with epileptic children," *Neurology*, Vol. 62, Issue 12, pp. 2303-2305.
- Lago, Dan, Delaney, Mary, Miller, Melody, and Grill, Claire (1989) "Companion animals, attitudes toward pets, and health outcomes among the elderly: A long-term follow-up," *Anthrozoös*, Vol. 3, Issue 1, pp. 25-34.
- Lockwood, Randall (1983) "The influence of animals on social perception," in Katcher, Aaron H. and Beck, Alan M. (eds.), *New Perspectives on Our Lives with Animal Companions*, University of Pennsylvania Press: Philadelphia, PA, pp. 64-71. (コンパニオン・アニマル研究会訳「動物の存在が社会的知覚に及ぼす影響」『コンパニオン・アニマル：人と動物のきずなを求めて』誠信書房, 1994, pp. 39-55, 第4章.)
- Lorenz, Konrad Z. (1958) *So Kam der Mensch auf den Hund*, Wien: Verlag Dr. G. Borotha-Schoeler. (translated by Marjorie Kerr Wilson, *Man Meets Dog*, London: Methuen, 1964. 小原秀雄訳『人イヌにあう』至誠堂, 1966.)
- Martin, Francois and Farnum, Jennifer (2002) "Animal assisted-therapy for children with pervasive developmental disorders," *Western Journal of Nursing Research*, Vol. 24, Issue 6, pp. 657-670.

- Nagengast, Sunny L., Baun, Mara M., Megel, Mary, and Leibowitz, J. Michael (1997) "The effects of the presence of a companion animal on physiological arousal and behavioral distress in children during a physical examination," *Journal of Pediatric Nursing*, Vol. 12, Issue 6, pp. 323-330.
- Nathans-Barel, Inbar, Feldman, Pablo, Barry, Berger, Modai, Ilan, Henry, Silver (2005) "Animal assisted therapy ameliorates anhedonia in schizophrenia patients: A controlled pilot study," *Psychotherapy and Psychosomatics*, Vol. 74, Issue 1, pp. 31-35.
- Rollins, Nancy, Lord, Joseph P., Walsh, Ethel, and Weil, Geraldine R. (1973) "Some roles children play in their families: Scapegoat, baby, pet and peacemaker," *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, Vol. 12, Issue 3, pp. 511-530.
- Rosen, Robert H. (1986) *Healthy Companies: A Human Resources Approach*, New York: Amacom. (産能大学メンタル・マネジメント研究会訳『ヘルシー・カンパニー：人的資源の活用とストレス管理』産能大学出版部, 1994.)
- Tapia, Fernando (1971) "Children who are cruel to animals," *Child Psychiatry and Human Development*, Vol. 2, Issue 2, pp. 70-77.
- 新井肇 (2013) 「管理職のバーンアウトを防ぐ『柔軟な心』と『支え合う人間関係』」『総合教育技術』, 68巻10号, pp. 39-41.
- 飯田俊穂・熊谷一宏・細萱房枝・栗林春奈・松澤淑美 (2008) 「学校不適応傾向の児童・生徒に対するアニマルセラピーの心理的効果についての分析」『心身医学』, 48巻1号, pp. 945-954.
- 岩橋和彦・吉原英児・和賀央子・吉岡正哉・三谷万里奈・石郷岡純 (2003) 「ペットタイプのロボット AIBO による統合失調症患者の陰性症状改善の試み」『精神医学』, 45巻, 7号, pp. 776-777.
- 加藤謙介・渥美公秀 (2002) 「動物介在療法の導入による集合性の変容過程：老人性痴呆疾患治療病棟におけるドッグ・セラピーの事例」『実験社会心理学研究』, Vol. 41, No. 2, pp. 67-83.
- 楠林咲希 (2017) 「癒しとしてのペット：管理者のストレスを中心に」長崎大学経済学部卒業論文.
- 佐藤友香・宮崎拓弥・千丈雅徳・田中稜一 (2003) 「動物介在療法が著効を示した難治性境界性人格障害の1例」『精神医学』, 45巻6号, pp. 659-661.
- 白木照夫・小谷良江・岡村典子・浅田知香・松本久子・坂田恵美・西藤美恵子・藤岡邦子・相田保季・平田久美 (2016) 「一般病院緩和ケア病棟における動物介在活動」『Pal-

liative Care Research], Vol. 11, No. 4, pp. 916-920.

- 鈴木みずえ・山本清美・松井由美・小嶋永実・大山直美・神田政宏・大城一・金森政夫
(2002)「痴呆性老人を対象とした動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT) の個別の効果と経過の分析」『保健の科学』, 44巻 8号, pp. 639-646.
- 露口健司・高木亮 (2012)「学校管理職のバーンアウト・プロセス: 適合理論アプローチによる影響過程の探索的分析」『九州教育経営学会研究紀要』, 18号, pp. 63-72.
- 中村智帆 (2015)「愛知少年院における矯正教育の事例研究: 更生支援パートナーシッププログラムの現地調査を踏まえて」『同志社政策科学研究』, 17巻 1号, pp. 137-152.
- 浜田利満・横山章光・柴田崇徳 (2003)「ロボット・セラピーの展開」『計測と制御』, 42巻, 9号, pp. 756-762.
- 林良博 (2012)「バイオセラピー学とは何か」林良博・山口裕文編著『バイオセラピー学入門: 人と生き物の新しい関係をつくる福祉農学』講談社, pp. 1-4, 序章.
- 松尾英輔 (2012)「暮らしのなかにみる動植物とのかかわりの効用」林良博・山口裕文編著 (2012)『バイオセラピー学入門: 人と生き物の新しい関係をつくる福祉農学』講談社, pp. 158-159, コラム 2.
- 的場美芳子 (2015)「アニマルセラピー: その背景と近年の研究」『aromatopia』, 24巻 1号, pp. 57-59.
- 宮下敏恵 (2013)「小・中学校教師におけるバーンアウト低減のための組織的取り組みに関する検討」『上越教育大学研究紀要』, 32巻, pp. 211-218.
- 宮下敏恵 (2016)「小・中学校教師におけるバーンアウト低減のための組織的取り組みに関する検討 (2)」『上越教育大学研究紀要』, 35巻, pp. 147-155.
- 本岡正彦・小池弘人・南出正樹・鈴木忠・小坂橋喜久代 (2002)「犬による動物介在療法の生理的効果と運動療法への応用の可能性」『看護学雑誌』, 66巻 4号, pp. 360-367.
- 柳澤桂子 (1994)『いのちとリズム: 無限の繰り返しのなかで』中公新書.
- 山崎恵子・町沢静夫 (1994)「動物活用療法」『精神療法』, 20巻 6号, pp. 484-492.
- 横山章光 (1996)『アニマル・セラピーとは何か』日本放送出版協会.
- 横山章光 (2001)「総合精神病院における AIBO での RAA (ロボット介在活動) の試行」『ヒューマンインターフェイス学会研究報告集』, 3号, pp. 1-4.
- 横山章光 (2002)「ロボットを活用した精神医療の可能性: アニマルセラピーの視点から」『最新精神医学』, 7号, pp. 439-447.
- 吉田尚子 (2015)「アニマルセラピーの現状と応用」『小児保健研究』, 74巻 3号, pp. 361-365.